

誌上発表

71 高野長英から大窪綱介宛の書翰

杉立義一

高野長英の自筆書翰はどれほど現存しているだろうか。『高野長英伝』（昭和十八年）を繰ってみると、約四十点を数えた。宛先をみると肉親と知友がほぼ半数を占めた。

医史学会で発表されたものとして、秋山練造（陸軍々医総監）が昭和三年十一月二十一日、医史学会例会に於て、「高野長英先生の書翰に就て」と題して、天保年代八王寺に住んでいた祖父の秋山義方にあてた長英の書翰について報告し、これを「中外医事新報」第一一四五号（昭和四年）に掲載し、また『高野長英全集』第四巻に写真を附けて詳細掲載されている。

書翰其一は天保二年四月十日付で長英二十七歳、義方

五十五歳であった。義方は数年前から蘭方を学んだ関係から長英一行を厚く接遇した事に対し、丁寧な謝辞を述べている。

書翰其二は天保四年（青地林宗の死亡を報じている）三月廿日附、前半に拙著七冊（医原枢要）をお送りした。後巻もやがて上木するので御出金をお願いすると。後半は一転して、此の書状を持参する同国人知友（書状其三で渡辺道一とわかる）に対し、何分とも一宿のうえ御心添を頂きたいという趣旨を書いている。

筆者がここに紹介する書翰は、其二と同じ日に書き、前半は多少文言が異なる（人身窮理書——拙著七冊）が、後半はほぼ同文である。

次にそれを再録する。

廣陵已來不得拜／接如何 御盛業／と奉賀候 小生于今／酒氣不醒 但シ近／來ハ少々相改申候／而去冬ヨリ人身窮／理書彫刻二取／懸申候 本月初卷／耳出來いたし候先ニ／呈電覽候 尚近／日後卷追々与入／梓候間 可呈候／○此人ハ小生同國旧／來知友ニ候 此度表／向有馬湯治相願 其／実ハ西遊之心底ニニホ／處 親族并ニ同僚

/之もの相遮 不斗/当今窮迫之躰/但シ西遊之儀ハ宿
 /志ニ候ゆへ是非相/達度強而臨逆/旅候 仍而小生道
 /中筋知友ニ 寄書/相託呉候様被相頼/此度添書いた
 し候 西書/ハ未夕讀不申候得共/元來西学ニ志深/漢
 書ハ少々讀申候/為人元^{ヨリ}篤実/罷出候ハハ何分御一/
 宿被下 夫々御心添/御世話被下度 此度/重々奉折候
 書/外 渡辺に口頭に/相託 草々斗/申述候 以上/
 三月廿日/高野長英/大窪綱介様

宛先の大窪綱介(二代章言、一八〇一—四八、甲斐国巨
 摩郡大井村)は京都に行き新宮涼庭、藤林普山に学びさら
 にシーボルト塾に入り長英と識る。門弟多く、甲州蘭学
 の祖と云われる。手紙を持参した渡辺道一は仙台藩医学
 校総督渡辺道可の嗣子であり、後年医学校教授となり万
 延元年没した。道可は佐々木中澤を招いて和蘭医学を教
 授させた。この書翰を讀むと、当時の蘭学者仲間の連帯
 意識を実感することができる。

(京都医学史研究会)